

アジア NGO ESD ネットワーク スラバヤワークショップ

2010年8月1～4日 スラバヤ

アジア ESD ネットワークの可能性に関する検討からの主な議論結果

2010年8月1～4日、インドネシアスラバヤにおいてアジア ESD ネットワークの可能性についての検討に関する議論を行った。議論の主な成果の要約は、以下の通りである。

1. アジア諸国が直面している ESD に関する課題には、幅広いステークホルダー間で ESD が認識されていないということに限らず、好事例や ESD のコンセプト、原則、手法や行動を理解するための能力強化の機会へのアクセスが困難という問題がある。
2. アジアにおいて、数多くの地域コミュニティに根差した ESD 活動が行われている。こうした ESD 活動の知識や経験を共有するネットワークを構築することには有益性・有用性がある。
3. ネットワークの目的および活動の焦点を明確にするため、ネットワークのメンバーを NGO および市民社会組織とする。大学やその他高等教育機関、専門機関、地方行政機関、企業はワーキングパートナーという扱いとする。
4. ネットワークは、主に以下の機能をもつ。
 - ・ ESD に関する知識および好事例の共有
 - ・ ESD のコンセプト、原則を対象とするステークホルダーグループに広げる
 - ・ 研究活動、特にアクションリサーチ
 - ・ 研修及び能力強化活動
 - ・ 政策提言
5. 初期段階においては、ネットワークをインフォーマルで、緩やかで柔軟なものとし、徐々にその目的、メンバーシップ、活動の領域を広げていくこととする。こうしたネットワークの出発点としては、AGEPP のネットワークがふさわしいと思われる。2014 年の国連持続可能な開発のための教育の 10 年の終了までに、「アジア ESD NGO ネットワーク (ANNE)」といったような、よりフォーマルなネットワークの立ち上げに結び付けていきたい。
6. ネットワークのメンバーが、このネットワークに対しオーナーシップを持つことは重要である。オーナーシップは、知識や経験の共有や、研修の機会などのメリットを享受できることで醸成される。証書やロゴ、レターヘッドなどの使用によっても、オーナーシップを強めることができる。
7. 初期段階のネットワークのアクションや成果としては、以下の事柄が想定される。
 - ・ 既存の資料、好事例、情報キットなどの整理
 - ・ 既存の 34 事例のさらなる分析
 - ・ アジア ESD の専門家や関連機関のディレクトリー機能
 - ・ 有益な ESD に関する知識や好事例に簡単にアクセスできうるデータベースもしくはウェブサイトの構築
 - ・ オンライン上でのコミュニケーションや、顔を合わせた形での定期的な会合
 - ・ 特定の ESD の優先課題に関する協働リサーチ
 - ・ 既存の事例をベースにした、大学の教授や、児童、地域コミュニティの人々など特定の対象グループむけの学習教材開発

- ・ 特に NGO やメディアのための能力強化プログラムの実施
 - ・ 地方政府向けの能力強化プログラムの実施
 - ・ ICT 教材開発に関する研修プログラム
 - ・ ESD のグッドプラクティスのさらなる事例・文書化
8. アジアには、ESD に関し、数多くのテーマ別の地域、準地域のネットワークが存在する。これらネットワークとの協働や各ネットワークがもつ情報・リソースを利活用する方向を検討していくべきである。
9. 大学は重要な役割を担う。大学の組織的制度は、国によって異なるかもしれないが、大学や他の高等教育機関との戦略的なパートナーシップは強化されるべきである。
10. 今回のワークショップの議論に基づき、次のとるべきステップはプロジェクトの企画立案である。これに関連し、持続可能な開発のための教育の 10 年推進会議 (ESD-J) は、ネットワークの暫定事務局の役割を担うこととする。プロジェクトにもならない活動についても検討を進める。国連のシステムや、他の ESD 関連の国際コミュニティにおいて、ネットワークが認知されるような努力がなされるべきである。